

# 鹿島鍋島家旧蔵直條宛『日野亜相芳翰』

## — 解題と翻字 —

### 解題

架蔵本『日野亜相芳翰』三巻三軸の旧蔵者が、佐賀鹿島藩鍋島家であったことは、内容から明白であつて全く疑う必要はないが、鹿島藩や鹿島鍋島家の蔵書印や直條、あるいは伝蔵者の書き入れ等々といったものは、一切ない。やや簡素な装幀ではあるが、外題簽の筆蹟は、三巻ともにまごうかたなき直條の筆蹟であり、貞享末年より元禄初めにかけて装幀されたままの姿で現在に伝えられているものと推定される。『芳翰』三巻の成立と装幀の時期を前記のように想定した理由は、貞享四年七月二十九日、権中納言従二位日野資茂が三十八歳の若さで薨じ、そのちようど一か月後の八月二十九日に、父である前権大納言正二位日野弘資が七十一歳で薨じるといふ突然の訃音に接した直條が、二人の書簡を歌道の師の遺品として、哀しみに打ち拉がれつつ、忽々の間にまとめたものと思われるからである。

三巻（原巻に巻数は与えられていないため、便宜のために、筆者が仮に巻一・二・三の順番を与えた）の大概を示せば、第一巻には

井 上 敏 幸

一二通、第二巻には一三通、そして第三巻には一五通の都合四〇通が収められており、内容からいえば、全部が直條宛で、日野弘資のものの一三通、日野資茂のもの八通、さらに飛鳥井雅章の一通である。四〇通全てが、日付のみあつて、年号等の記載は一切見受けられないが、日野父子と直條との交渉や、手紙に記された事件等々により、四〇通の全てが、延宝三年より貞享四年までのものであることがわかる。判明する年次日を、番号順に示せば以下のごとくである。その根拠について、簡略な考証を付記しておくことにする。

三、弘資書簡 延宝四年卯月二八日

（本文、「去年、神奈川へ御使者之節」は、伝奏役を終え、帰洛せんとする弘資の江戸の宿舎を訪い批点を乞うた延宝三年三月二〇日頃をさす。『鹿島年譜』『徳川実記』）

四、弘資書簡 延宝四年卯月一日

（本文「神奈川江御使者」は、三に同じ。）

八、弘資書簡 延宝四年六月二三日

（本文「去春神奈川江預御餞別」は、三に同じ。）

九、資茂書簡 延宝六年卯月三日

（本文「旧臘中納言拝任」による。『公卿補任』によれば、資茂は延宝五年閏二月二日、中納言に任じられている。）

一一、弘資書簡 延宝三年後卯月二三日

（延宝三年に、閏四月があることによる。）

一二、弘資書簡 天和元年五月八日

（本文「加藤内蔵助（明友）」「松平越後守殿家来（光長家来御預）」が、綱吉の越後騒動親裁にかかわるものであることによる。）

一九、弘資書簡 延宝四年六月四日

（延宝四年五月五日 京都大雨、七日鴨河洪水。『徳川実記』）

二一、弘資書簡 天和元年六月二日

（二一の弘資書簡の記事「中納言初而致参向」と一致することによる。）

二二、資茂書簡 天和元年二月二六日

（二一、二二と同じ折のことを、『新代之御禮』のための「当春者参向」と記していることによる。）

二三、弘資書簡 延宝三年正月六日

（本文「爰元回祿」が、延宝三年一月二五日の京都の火災の記事（『太平年表』）に一致することによる。）

二五、資茂書簡 天和元年十一月四日

（本文「諒闇明候而、改元」が、延宝九年九月二九日に「天和」と改元されたことによる。）

二六、弘資書簡 延宝三年六月一日

（本文「先月十二日御帰城之由」云々の記事が、直條の漢文紀行「信筆録」の記載と一致することによる。）

二八、弘資書簡 延宝五年七月二三日

（本文「愚宅江被寄光駕、久々ニ而得御意」が、延宝五年の直條の漢文紀行「北響録」の記事「日野重相公省恩賜。其余京・伏見相知者咸来問」と一致することによる。）

二九、弘資書簡 延宝四年臘月一七日

（本文中に「先年」の「神奈川」での出会いについて述べていることによる。）

三〇、資茂書簡 貞享四年七月八日

（本文「先日者御来駕得貴慮」が、三八の弘資書簡と同日であること、また、直條の漢文紀行「興来日録付六旧跡記」の記事で、弘資・資茂両公邸宅を同じ日に訪問していることによる。）

三一、弘資書簡 延宝五年三月五日

（三二一の延宝七年三月二三日付書簡より弘資の花押の形状（花押影印2）が変わることから、それ以前であることが知られ、また直條の江戸滞在期間、延宝四年三月～同五年五月迄と延宝六年夏～同七年夏迄とを勘案すると、本書簡（花押影印1）は延宝五年と確定することができる。猶三三（延宝五）（花押影印3）及び三七（延宝六）（花押影印4）に類似の形状のものがある。）後掲花押影印1～4参照。

三二、弘資書簡 延宝七年三月二三日

（本文「主上御抱瘡云々」は、延宝七年四月一三日、靈元天皇の抱瘡により、参向がけふ（十三日）まで延びた（『徳川実紀』）ことによる。）

三三、弘資書簡 延宝五年五月一八日

（本文「先刻者光臨、久々ニ而得御意」が、二八と同じく直條

の紀行『北響録』と合致し、本書簡は、直條と別れた直後に、伏見か、大坂へ送られたものと考えられることによる。）

三五、弘資書簡 延宝六年卯月三日

（本文「資茂舊冬中納言拝任」による。九に同じ。）

三七、弘資書簡 延宝六年二月二日

（本文「宰相義舊臘中納言拝任」による。九、三五に同じ。）

三八、弘資書簡 貞享四年七月八日

（三〇と同じく、『興来日録付六田跡記』の記述と「本文」の

「愚宅江云々」の記事が同じであることによる。）

四〇、弘資書簡 延宝七年二月二日

（本文の「泉州御別荘之景御屏風」が、弘資へ賜られており、花頂山の完成した景を描いたものと考ええると、延宝六年七月に

直朝が花頂山に移った直後の延宝七年と考えられる。）

四〇通の中に、一七飛鳥井雅章の書簡一通がまぎれて貼込められた感じであるが、この雅章書簡も、雅章が、延宝七年一〇月一二日に薨じているところから、延宝七年以前のものであることは分かるが、それ以上のことは分からない。本文中に「先日鞠扇御所望之由」とあることが、やはり注意されよう。日野弘資・資茂父子書簡の重要性は、具体的な直條歌の批点についてのやりとりのみではなく、この時代の直條の伝記上の空白を埋めるものとしても注目されるのであるが、こうした点についての詳述は、別に稿を改めることにする。以下、簡略に『日野亜相芳翰』の書誌を記す。

# 書誌

書名 日野亜相芳翰 所蔵者 井上敏幸

書型巻冊 卷子本 三卷三軸 第一卷 一八・七糎×一、一三七

糎。第二卷 一八・五糎×一、一八五糎。第三卷 一七・

〇糎×一、三九九糎。

装幀 原装。

料紙 紙本、楮紙。無界。

表紙 原表紙。第一・二卷、紙表紙。第三卷、紺色絹布無紋表紙（六

割程絹布剥落）・見返し 金銀泊散し。

題簽 檀紙。無辺。墨書、三卷ともに直條自筆、「日野亜相芳翰」。

構成 序・目録・跋等一切なし。

本文 字高 第一・二卷 一八・〇糎前後、第三卷 一六・〇糎。

日野弘資・資茂父子・飛鳥井雅章の自筆原簡。

蔵書印等一切なし。

最後に、翻字、あるいは年次推定作業にさいし、力強い支援を戴いた鹿島市立図書館の高橋研一氏に対し、深く感謝申し上げます。

1 (三一)



3 (三三)



2 (三二)



4 (三七)



## 翻字

### 一、日野弘資書簡

卷1-1

追而加藤内藏助堅固之由被仰聞、畏悅之事候、加藤内藏助御參會之節、愚夫義被仰候由、猶爰元も御噂耳申事候、猶以永日可申承候、

新陽之嘉慶預芳翰畏存候、寔千喜万幸不可有休期候、御健達御超歲之由珍重存候、当表公私安泰迎春申候、御傳筆之趣、中納言ニ申聞候者、畏存、宜申入旨ニ御座候、元旦、歲末之御詠拝見候、何茂出来加愚墨申候、其御地珍重之御吉左右相待申事ニ御座候、随而先年給置申候御屏風に海邊之古哥など仕付可申哉、今一度承而など存、預置申候、追而之御札に可預候、猶永日万悦可申述候、恐々謹言、

正月廿五日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
(藏)  
御報

### 二、日野弘資書簡

卷1-2

追而内々之御屏風如何様之哥可仕候哉、海邊之哥四五首ニ而も可然候哉、得御意候事候、以永日可申入候、

新陽之御慶不可有際限候、倍御健康可為御超歲珍重之事ニ存候、此表無異儀、春光逐日和暖、愚拙堅固ニて勤仕候、随而去年被差越候御詠、其以後彼是取込之義御座候而延引申候、漸頃日透々一覽申候而、任愚存、加墨進入候、猶以永日可申述、万悦候、恐々謹言、

二月朔日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
(藏)

### 三、日野弘資書簡

卷1-3

追而一卷合点、所々愚存申入候、初之一卷是又返納候、尚以後便可申入候、

十七日從遠州之芳翰令薰誦候、弥御無異可為御參府存候、此表相更儀無御座候、先日之五十首之中一兩首御改作、別而宜存候、其外何も珍重之事ニ候、任愚見合点入見參候、御不審之事も御座候者可承候、御慰ニ存、不顧僻存申入候間、無御隔心、御不審など候ハ、可承候、

一去年神奈川へ御使者之節申入候御返答先日被書付被下候、呉々見申候へは、弥無不牀義御座候、乍去改申候も如何ニ候間、從跡仕付可令遣候、他事期後音不詳候、恐々謹言、

(嘉永四年)

卯月廿八日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
(藏)  
御報

### 四、日野弘資書簡

卷1-4

追而和泉守殿御城地之様子・景氣等堅被書付可被下候、所々名以下具承度存候、

別希之芳翰是又令披閱候、去年江府罷在申候刻、神奈川江御使者御詠之奥ニ任筆御返答申候、愚哥又之後、御詠拝見、紙尾ニ仕加申候而首、別紙ニ仕付可進之由承候、任筆候而留置申候義も無御座候間、御改申入候、

一御詠一卷被差越候、静卷舒加吟味申候而、從跡可申入候、

(御高御)

一和泉守殿御心安得御意申候義被聞申候、御領地之景相應之古哥仕付、可令遣之由御望之由、得其意申候、宜被仰入候、事々御使ニ

申入候間、不詳候、恐々謹言、

(花押)

卯月十一日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
御報

## 五、日野弘資書簡

卷1-5

追而此掛香頃日致調合候而、御慰二入見參候、祝候而一樽差副申候、

今朝者預御使札令畏悅候、先頃於御領所御氣分不宜候得共、逐日御快然、舟中御健達被成、至其地御着之由珍重存候、内々者爰許へ御立寄可被成思召候得共、直二御通之由、千々萬々御残多存事二候、弥道中御無異御着府之御左右可承候、  
(通御座)  
一今朝承候和泉守殿御所望之古哥之義、色紙等御様子堅承度存候、從江府可被仰越候、猶口上申入候、恐々謹言、

卯月十一日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
(通御座)

## 六、日野弘資書簡

卷1-6

追而御事多可有之、御中早々預御使札令怡悅候、殊二有田香炊開筥早々一覽申候處、唐冠珍敷偏過量難申尽候、

武陽御參勤、海上御無異、一昨八日至大坂御着岸之由、早々御使札令畏悅候、当地御立寄可被成思召候處、御国本御出船之節、所劳故、江府老中江御断被仰入、御保養候而、御免駕之事候故、直御通之由不得御意、御残多存候、被思召付色々、如御目録拝受、過量之至存候、猶御使者江申入候、恐々謹言、

卯月十一日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
御報

## 七、日野弘資書簡

卷1-7

追而昨日如申入候伊勢物語之色紙、近々可被下候、委曲口上申入候間、不詳候、

昨日者從大坂早々御使札畏存候、今夕其許伏見江御着之由珍重存候、当地御立寄無之、直二御通之由、御残多存事候、来春御帰国之節者必々此表御立寄庶幾存候、昨日之絵乍無調法仕付候、散々見苦表具など被仰付候義者、如何と存候、將又此掛香頃日致調合而、御慰二進入候、祝申肴一種差副申候、道中御堅達御着府之御左右可承候、猶口上二申入候、恐々謹言、

卯月四日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
(通御座)

## 八、日野弘資書簡

卷1-8

追而旦節御床鋪御噂耳申事候、人見友元堅固被勤候哉、御参会申、宜預御心得候、委偕以後便可申述候、

当十二日之芳墨令薰誦候、如来論、乍時分、当年者別而何方茂暑氣甚候處、御健達之由珍重存候、此表相更儀無御座候、  
一先日被差越候御詠、所々愚存申入候趣、御披覽之由、猶御不審候者可承候、且又去春神奈川江預御餞別申候刻、御返音申入候愚哥書付可令遣之由、何分吟未申、如何敷候へ共、重而仕付可令遣候、一其許御庭之楓林何とぞ愚詠仕付可遣之由、御庭之圖被差越候、内々

(元山宗茂)

花山重相御物語二而承候、今度御登被成候給見申候而、景令推察、重而罷下申候義も御座候、是非〱以閑見物可仕存事候、一御城地之景、是又絵被差越候、似合敷哥尋出仕付可申候、事々期後音、早々申残候、恐々謹言、

(室生四生)

六月廿三日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
(直條) 御報

## 九、日野資茂書簡

追而老父・拙夫堅固二罷有候間、可被御心安候、以上、

御使札令怡悅候、先以舟中御無異、大坂迄御着之由珍重二存候、今度者御立寄有間敷由、千万御残多存候、仍御国元之焼物・香爐并御肴一桶過量之至二存候、香爐別而見事二候而、詠入候、尤可致秘藏候、如示来、旧臘中納言拝任忝仕合二存候、重而萬々可申述候、恐々謹言、

(堀六生)

卯月三日

日野中納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
(直條) 貴報

## 十、日野弘資書簡

追而香炉見事二出来、偏難申謝候、随而内々被差越候御詠先日進入候、其後彼是取込之義共御座候而、遅引之事候、任愚見加點進候、今程相達可申存候、御不審之義共重而可承候、御上京之節、於光臨可為欣悅候、

先月十三日之芳簡令薫披候、御健康御休息之由珍重存候、此表相更儀無之、愚拙堅固令勤仕候、然者去年申候唐冠之香爐被仰付、見事

卷1-10

二出来、為持被下、畏悅候事二御座候、所望之方へ差越可申候、可為大悅存候、近々江府御參勤、其節当地江御立寄可被成之由可得御意、悅存事二御座候、事々期面謁之時不詳候、恐々謹言、

三月三日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
(直條) 御報

## 一一、日野弘資書簡

追而此掛香此中調合申候間、御慰二入見參候、

御暇被遣、御帰国道中御健固、今日其邊江御着之由珍重存候、当地御立寄之儀も可有之哉与承候間、可得御意悅存候處、直二御通御残多存事二候、御無異御国御着岸之御左右可承候、御事多可有之存、早々申残候、恐々謹言、

(室生五生)

後卯月廿三日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
(直條)

## 一二、日野弘資書簡

追而加藤内藏助今度松平越後守殿家来御預之由、乍苦勞、大慶

之事二存候、自分二モ忌可存候、猶期後便早々申残候、

昨日者御使札畏存候、其節致他出、不即答候、猶江府首尾能御暇被遣、道中御健達、一昨草津御宿、昨日直二伏見へ御通、早々御出船之由、当地御立寄被成候者、可得御意候處、御残多存候、如貴論、中納言初而致参向候而、万端首尾能相勤候由被仰聞、令大悅候、中納言方度々御見舞之由畏存候、下拙所勞之義御尋候へ共、逐日快復申候由、中納言申候旨被仰越候、弥打統致本復申事二候、御帰城之

卷1-12

御祝儀とし而御太刀・御馬代過量之至存候、海路愈御無異御着岸之御左右可承候、他事以後便可申入候、恐々謹言、

(天和元年)  
五月八日

鍋嶋備前守殿  
(直條)  
御報

日野大納言

(花押)

### 一三、日野弘資書簡

卷2-1

追而宰相へ御加筆之趣申聞せ候、忝存候、拙夫宜申入之由申候、猶期後便申残候、

海路御無異可為御着岸存候、先月廿一日難波御乗船之刻、芳簡御事多可有御座候處、偏畏悅令薫披候、如示諭、先日之題御尋、久々二而得御意、大悦難申述候、乍去早々之仕合、于今御残多存事二御座候、然者先日之一卷杯を被下候、如何二も例之廉相御書改令遣候、且又御物語之屏風是又被差越候、御屏風二而は景氣モ見え申候、此屏風二仕候事二候哉、追而可承候、当表相更儀無御座候、事々以後音可申伸候、恐々謹言、

六月十六日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
(直條)  
御報

### 一四、日野資茂書簡

卷2-2

追而内々被示越候哥書之義、此間書か、り出来候、別而見苦、中々御用二者立申ましく候へ共、餘遅々二成候間、先進入候、猶重而書改申度候、扱者此方ども御無心申入度候、御当地焼物花生一袖・香爐一□はいかやうにても申うけ度候、於御存心も可承候、花生ハ人二たのまれ候、香爐者所持仕度候、先日懸御

日候愚詠御覽被遊候ハ、此方へ御返頼入候、猶重而可申述候条、不詳候、以上、

去八月廿九日之御札令悦候、先以日外比も御病氣之処、今程御本復珍重此事候、寒氣之時分随分〳〵御保養專一二存候、扱者御詠一卷拝見申候、何茂珍重二存事候、猶從跡委曲可申入候、当表御安全花山院殿<sup>(花山院)</sup>弥無異御勤仕候間、可被希芳慮候、老父・拙夫無別条候、猶期後音候、恐々謹言、

十月廿九日

日野中

(花押)

鍋嶋備前守殿  
(直條)

### 一五、日野資茂書簡

卷2-3

芳翰令悦候、如示諭、新春之嘉慶不可有休期候、先以御堅固御重歲珍重二令存候、当表禁裏・院中倍御機嫌能、次老父・拙夫無異二越年候、猶期永日之時候、恐々謹言、

正月廿三日

日野中納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
(直條)  
尊報

### 一六、日野弘資書簡

卷2-4

追而中納言江御傳筆之趣申聞候、一段健固致重宝候、宜申入之由御座候、事々期永日拝候、陽春之御慶、預御簡畏存候、寔以千喜万幸不可有際限候、倍御健康御重歳之由珍重存候、此表公私安靜、迎春先申候、元旦之御詠可有御座存候、拝見申度存事二候、猶永日可伸萬令省略候、恐々謹言、



正月十七日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
御報

一七、飛鳥井雅章書簡

卷2-5

九月廿一日之芳札到来、令披見候、其表無別条、愈御堅固之由珍重存候、手前無替儀候間、可御心易候、然者先日鞠扇御所望之由承候間、則免状進之候処、相達候由、得其意候、仍為御祝義毛鹽三枚給候、御事多中御慇懃之至、過量存候、頃日御指合御座候而、御延引之由令承知、尤存候、猶期後音候条、不能詳候、恐々謹言、

霜月四日

雅章

鍋嶋備前守殿  
御報

一八、日野資茂書簡

卷2-6

追而世間も長閑二成、爰元之梅も漸咲申候、其元如何候哉、扨者去年之一卷所劳故、追々仕候、追而可承候、来三月江戸へ御参府之節、必々御来臨待奉候、其節万々申承候、猶後音不詳、以上、

正月三日之芳札令披覽候、先以御無異御超歳珍重不過之候、当表益御静謐之御事二御座候、然者試筆之御詠拝見仕候、何茂珍重二存候、御心希存候故、不顧慮外所存書付申候、猶御吟味可被遊候、旧冬より下官相煩候故、御会始二も詠進不仕候、其寫を入可申存候処、老父方より令進候由承候故、無其儀候、下官所劳も今程者快気仕候間、可被希尊慮候、事々期後喜之時候、恐々謹言、

二月九日

日中納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
御報

一九、日野弘資書簡

卷2-7

追而先日被仰越候愚哥之義、其以後彼是延引申候、追付仕可呈進候、泉州御望二て、所之景氣、所之名なと御書付可被差越候、委曲期後音之時候、

先月廿一日之芳簡令披閱候、道中御無異御着、首尾能御参勤御禮被申上候由珍重存候、其以後聊御気分不宜候由、是又無御心元存候、当年者超例雨繁候而、湿氣深故与存候、随而此表洪水之事御尋二候、先月至五日至七日大雨打続、方々洪水之事二候、其後雨繁候而、漸頃日屢晴候、仍而暑氣儀甚覺申候、花山亜相一段御無異御勤仕、拙夫茂堅固罷有候、他事期後音不詳候、恐々謹言、

霜月四日

日野大納言

六月四日

(花押)

鍋嶋備前守殿  
御報

二〇、日野弘資書簡

卷2-8

追而中納言方江香爐・香合等色々被遣、何茂見事二候、うらやましく存候而、香合取申候、下拙も焼物之義可申入候得共、只今病氣故、焼物ハ望二存不申候、長崎江便御座候者、蓮根粉<sup>少</sup>又紅糞<sup>少</sup>申請度存候、右両種長崎二御座候由申者候二付申進候、糞黒糞も少申請度存候、葉之由承、如此御座候、

遠境久以愚書不申承候処、芳簡怡悅令早披候、倍御健康御在城之由珍重存候、御詠逐一覽申候、所々宜様承候、為御慰所々加卑詞悉合墨進候、別二卷任愚存、加點申候、随而下拙病氣于今同篇之内逐日



致快復候、他事期後音候、恐々謹言、

九月十日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿

## 二、日野弘資書簡

卷2-9

追而其以後久御詠拜見不申候、御休息之内御静ニ御詠候ニて拝見申度候、事々重而可申述候、

海路御健躰御無異、先月廿四日御帰国之由、早々御飛札辱令薫披候、先頃伏見御通之節茂御事多可有御座處、預芳章辱存候得者、当地御立寄無之、御残多存事候、然者中納言義江府首尾能御目見仕、去月十四日御暇被下、十六日致発足、道中無異、廿六日致上京候、猶江府義度々御見舞被成、御懇意共之由申聞、辱存候、随而下拙所旁、頃日暑氣甚候得共、別義無御座、打続致快復候、御帰城之御祝儀御座候而、錦紗<sup>三卷</sup>并粕續海茸拜受、過量之至存候、事々期後音、早々令省略候、恐々謹言、

(天和元年)

六月廿一日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿

御報

## 二二、日野資茂書簡

卷2-10

追申、今一卷之御詠草は御奉納とみえ候、下拙旧冬より□眼ニ御座候故、拝見不仕候、乍去一兩日以前清成候、猶老父へ相達可申候、当地何にても御用之義者うけ給へく候、猶重不詳候、以上、

花山院殿御下向二付一書令啓候、先以其御地益御靜謐御自分御健躰

(花山院殿)

超歳之御事珍重ニ存候、年始并旧臘之芳翰怡悦仕候、其御地御参府候而、新代之御禮首尾能相済候由、珍重不過之候、当春者参向仕、

萬々可得御意存候處、無之儀残念此事ニ存候、何とそ御自分其元ニ御座候節、罷下、寛々と得御意申度存候、扱者老父氣色度々御尋御傳言之通申聞候へ者畏入候、次第ニ快氣仕候、大方今程者常之様子ほとに罷成候、可被易芳志候、能々可申入之由申候、扱々御試筆拝見、とり／＼めつらしくおもしろく存候、殊ニ端之御詠、新代相應之御詠数吟罷有候、御心易存候故、不顧愚意憚多候へとも、所存申入候、必御沙汰有間敷候、猶後音申残候、恐々謹言、

(天和元年)

二月廿六日

日野中納言

(花押)

鍋嶋備前守殿

御報

## 二三、日野弘資書簡

卷2-11

舊臘九日之芳簡令披閱候、然者去十一月廿五日爰元回録之事被開召、逢程早々預御飛札畏悦申候、従市中出火、風烈候而、本院御前其外諸家五十餘家炎上之事ニ候、然共禁裏、新造御所御恙無御座候而、廿七日還幸被遊、諸臣之歛喜不過之候、法皇・新院・女院御所是又御安全之御事ニ候、随而花山聖相亭・愚宅などハ別条無之仕合ニ存悦申候、飛鳥井・中院亭者類火ニ候、今程者爰元一段静ニ罷成候、他事以別格新年御慶申入候、恐々謹言、

(寛文元年)

正月六日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿

御報

二四、日野弘實書簡

卷2-12

追而御事多御座可有之處、早々兩種恩惠之段難申尽候、其以後者御詠不預候、事々重而可申入候、

先頃之御返翰と御座候而、瑤章令早披候、益御健康御休息之由珍重存候、先日令遣候御詠三卷御披覽之由、御不審之義無御座候哉、随而下拙義所勞、于今同篇御座候由、少宛逐日令快復候、

一蓮根粉・棗紅黒之義申進候處、早々御取寄被成拝受、畏悦之御事御座候、於爰許致吟味候、別義無御座由、何れも申候、蓮根粉珍物二御座候、自然者当地へも参候而、餅などに仕食申候由申者も御座候、兩種何れも一段葉二御座候由、醫師共申候故、偏過量無所謝候、猶期後音申残候、恐々謹言、

臘月朔日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
返報

二五、日野資茂書簡

卷2-13

猶々先日比者少々御所勞□□在所へ御越之由被申、弥御快然□□うけ給度候、当地花山院二も無爲二被勤候、可被御心易候、以上、

其後者御物遠に存候、次第二寒氣二罷成候、弥可爲御堅固と存候、当表諒闇明候而、改元首尾能相済、先月廿七日和哥御会始之義打つ、き御会有御座候、当月者奉行下拙勤仕候、御会始之寫可有御覧かと進入候、爰元初雪当月六日之夜降候、其元如何候哉、さためて可有御詠吟と覚候、老父気色も寒氣二痛御座候、事々期後音之時候、恐々謹言、

(天和元年)

十一月十四日

日野中納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
御報

二六、日野弘實書簡

卷3-1

追而御帰国之節、御事多可有之候處、早々御札偏無所謝候、事々以後便之節、可申入候、御詠候て、十首廿首にても可被差越候、且暮御床布御噂而已申事候、

海陸御無事、先月十二日御帰城之由、早々預芳簡、畏悦令薫誦候、愈健躰御休息之由珍重存候、伏見表御通之節者、爰許へも御立寄可有之哉と内々待入致候處、直二御帰国御残多存事二候、当地無異之事二御座候、花山並相一段堅固御勤候、相役千種中納言二頃日被仰付、中院・拙夫偏忝致休息候、且又被思召付、有田焼香爐二・青貝之香合・同香盆并葱麥酒一壺、彼是御心入共之段難申謝候、香炉いづれも比よく桶珍敷候而、出来物二御座候、染付是又奇麗二自愛令秘藏申事候、香合・盆見事二様子よく候而、且暮不離座右詠可申存事候、

一先日之一卷其後令披覽候處、何茂事之外出来珍重二承候、いつれと難申中、猶任愚見、別而之様二存候分合点、所々加卑詞進覧候、猶其内御不審之義も御座候ハ、可承候、他事期後音、早々不詳候、恐々謹言、

(寛文元年)

六月十一日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
御報

二七、日野弘資書簡

卷3-2

追而内々承候御城地之景氣ノ哥之義とくと承度と存、令延引候、  
万縷期後便申残候、

(花山院源) 花山重相参向之間、令啓候、其御地益御静康之由、恐悅之至存候、

御自分弥御健達之由珍重存候、此表相更儀無御座候、其後者久御詠  
不承候、歳旦御作并御詠等可有之存候、拜覽申度存事二候、毎度御  
噂而已申事二御座候、爰許之義其花山殿御物語可有之候間、不詳候、  
恐々謹言、

二月廿一日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿

二八、日野弘資書簡

卷3-3

追而御屏風久々預置申候、如何にも哥可有御座存候へ共、残暑  
甚、其上取紛候義御座候而、令延引候、即御屏風二可仕付候哉、  
尚承度存候、委曲期後便申残候、

先月廿六日之御札令薫披候、海路御無異御帰城候而、弥御健康之由  
珍重存候、如貴示、先日当地御通之節者、愚宅江被寄光駕、久々二  
而得御意、畏悅之事二御座候、乍去即日伏見江御越之由承候故、何  
之御馳走申候義毛無之、早々之仕合于今御残多存候、其節申請候西  
湖十景本紙之筆者名、今度被為寫候画工之名失念仕候、御書付被成  
可被下候、十景之銘之手跡、是又見事御座候、承度存候、先以御物  
語水指之義不思召意、御所持之由早々被掛御意候、一段奇麗も様子  
も珍敷御座候而、偏過量欣躍之至存候、蓋も内々被仰付候与見え申、  
取手なと珍敷御座候、事々以後音可申入候、恐々謹言、

(嘉永五年)

七月廿三日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿

御報

二九、日野弘資書簡

卷3-4

追而御思召付、鮭塩引三過量之至存候、随而爰元漸雪降申候而、  
卒興之詠等之事承候、彼は無閑暇、左様之義も無御座候、  
(花山院源) 花山重相一段御堅固御勤候事候、委曲明春可申入候、

当朔日之御札令薫誦候、久以愚書不申入御噂耳申罷有候刻、偏畏  
悦申事候、夏比者旅之御気分不勝申候様二承候處、今程者御健達  
之由珍重存候、当表相更儀無御座、拙夫堅固罷有候、

一 先年其御地罷出申候節、神奈川江御詠之御返音申入候、愚哥之義、  
当度も承候、吟未申候て、瓦礫書付申候義、如何と延引仕候處、  
重而承候、御慰二候間、仕付遣候、必々御他見無之様二頼存候、  
御庭楓園之愚哥之事何とも趣向無之、延引仕候、猶其内存寄申候  
て、仕付可得御意候、

一 御城下之風景之事、何とも推量二ハ難仕候、来春御帰国之節、当  
地御立寄可有之間、其節具被仰聞候而之由、偏所希存候、加藤  
(明友) 内蔵助無異、切々御参会之由被仰聞、是又畏存候、事々明春可申  
入候、恐々謹言、

(嘉永四年)

臘月十七日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿

御報

三〇、日野資茂書簡

卷3-5

追而愚詠之義預御景候、何とも懸御目候者無之候、乍去御心易

存候故、此頃三十首詠候間、卒度入御轉覧候、かならずく御沙汰無之様頼存候、分聞えかたきのミ候、御覧候、以後御返弁頼入候、事々期後音候、不詳候、以上、

薰墨令怡悅候、先以海上御無異御着国之由、珍重ニ存候、如示来、先日者御来駕得貴慮、大慶ニ存候、乍去早々之仕合、于今残念之事候、当表御安全、老父・拙夫無異儀候、仍哥書之義何にても書写可進之由、御用ニ者立申、宜敷候へとも、得其意候、近日書付候而可令進候、心事期後音之時候、恐々謹言、

(寛政四年)

七月八日

日野中納言

(花押)

鍋嶋備前守殿

(花押)

### 三二、日野弘資書簡

卷3-6

追而其以後御詠不承候、歳旦之御作なとも可有之承度存候、御城地之景猶具承度存候而、延引之事候、委曲御城国之節可得御意候、

先月十二日之御札令披閱候、舊臘并当春以愚書申入候、御披覧之由令承知候、弥御健勇之由珍重存候、舊冬難止仕付遣候愚詠之義先年早卒吟未申、如何候へ共、仕付遣候事候、御園之楓林其後彼は延引申事候、当表相更儀無之、愚夫堅固罷有候、先日花山亜相参向之節、以愚書申入候、道中無異、昨日者其御地江可為参着存候、旦暮御床鋪御噂而已申事御座候、御帰城之刻、爰元江御立寄可有之由、大悦此事ニ存候、必々御立寄庶幾存事候、其節以面万緒可申述候、恐々謹言、

(寛政五年)

三月五日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
御報

### 三二、日野弘資書簡

卷3-7

追而先日御詠拝見、加愚墨進覧、御披見之由、其以後之御詠候由、花山亜相上京之節、拝見可申候、委曲御帰国之節、期面候、芳簡令薰披候、如示論、今度者 主上御庖瘡被遊候處、御輕早速御快然、当朔日御酒湯被召候而、弥逐日御機嫌能、公私之大悦御推察可有之候、随而御自分御健勇之由珍重存候、来月御暇被遣、御帰国之節、御立寄可被成之由、必々庶幾存事二候、花山亜相近々参向之事二候、花山殿上京之節、御詠可被差越候由、久御詠拝見不申、相待申事御座候、愚夫・中納言無異令勤仕候、御傳筆之趣申聞せ、畏存候由御座候、猶以後便可申述候、恐々謹言、

(延享七年)

三月廿三日

日野大納言

(花押)

鍋嶋備前守殿  
御報

### 三三、日野弘資書簡

卷3-8

追而此掛香頃日致調合候間、御慰ニ令進覧候、肴一種祝候而、差副申候、猶御無異之御左右可承候、先刻者光臨、久々ニ而得御意、畏悦難申述候、今少御物語申度存候へ共、其許へ今日御越之由承候故、御残多存事二候、御詠合点、處々愚存仕付候而、令遣候、猶御不審等候者、重而可承候、御物語之屏風一覽申候而、從是可得御意候、随而宰相も初而得御意、畏存候由申候、御会之写申付可令進之由ニ御座候、海路御健達御帰城之御左右可承候、恐々謹言、

（寛永五年）

五月十八日

日野大納言

（花押）

鍋嶋備前守殿

### 三四、日野弘資書簡

卷3-9

追而色紙出来候者、早々持参候様ニ可被仰付候、他事従是可申入候、

別帑之御札是又具令薰披候、然者伊勢物語詞書之義被仰越候、即下書三十枚給置申候、安御事ニ御座候、早々出来仕候様ニ可仕候、色紙之義被仰付候哉、猶原田新三郎ニ可被仰越候、

一本多備州絵被下候哥愚抔仕付可申由、得其意申候、しかのうらや遠さかりゆく波間よりの心に候由、御念入之段令承知候、其哥可仕付候、

一内々承候御城下風景之古哥、彼是令延引候、即給置候御屏風ニ可仕候、将又伊勢物語詞書儀者花山亜相（花押）へ御頼被成候由、花山亜相如例年二月下旬江府参向、首尾能御勤候、頃日上京一段堅達之事御座候、猶従是以愚書可申入候、恐々謹言、

卯月三日

日野大納言

（花押）

鍋嶋備前守殿  
御報

### 三五、日野弘資書簡

卷3-10

追而如貴論、此度者不得御意、御残多存候段、難尽筆舌候、道中御無異御着府之御左右可承候、事々御使者へ申入候間、不詳候、

武陽御参勤、海路御健達、昨夕大坂御着之由、早々預御使札令畏悦

候、当地御立寄之事御座候者、可得御意、内々存罷有候處、直ニ御

通之由、千萬御残多存候、御参府之御祝儀御座候而、御太刀目録并

書簡帑拜受、過量之（日野）「一、随而資茂舊冬中納言拜任之義承候、首

尾能蒙勅許、忝仕合存候、猶資茂御作ニ御札可申入候、先頃御作申

入御詠等遂拝覧進候、御披見之由令承知候、此表相更儀無御座候、

愚夫・中納言堅固令勤仕候、御事多可有御座候處、早々御使札難申

謝候、恐々謹言、

（寛永六年）

卯月三日

日野大納言

（花押）

鍋嶋備前守殿  
御報

### 三六、日野弘資書簡

卷3-11

追而御船ニて御詠少々御座候由、重而可承候、御帰城御休息之間も御座有間敷候處、早々預芳札畏入存候、猶以後音可申入候、先月十二日海路御無異御着岸之由、早々十四日芳簡偏畏悦令薰披候、当表御立寄之節者、愚宅江預御尋、久々ニ而得御意、大悦此事に御座候、中納言江茂御傳筆之趣申候、畏入存候、宜様可申入之由御座候、被思召付候而、白海月一桶・苾芻酒一壺、過量之至存候、委曲先書ニ申入候間、省略申候、猶以後音之時申尽候、謹言、

七月九日

日野大納言

（花押）

鍋嶋備前守殿  
御報

### 三七、日野弘資書簡

卷3-12

追而歳暮・元旦之御詠拝見候、珍重超例存候、事々以永日可申伸候、

新陽之嘉慶徒是可申入候處、早々御札令畏悦候、弥御健勇被迎春候、由珍重存候、当表公私安静之事御座候、随而愚夫堅固令重年申候、（日野寛）宰相義舊臘中納言拜任、忝仕合存候、中納言へも御札之趣申聞せ候、畏入存候旨、宜申入由申候、猶期永日後慶存候、恐々謹言、

（寛永六年）

二月十二日

日野大納言

（花押）

鍋嶋備前守殿  
御報

### 三八、日野弘資書簡

卷3-13

追而此掛香調合仕候間、入見參候、御心地如何と存候、中納言も以副書可申入候得共、宜申入候旨申候、

御出船以後、彼是以愚書不申入候、海路御無異可為御帰城存候、先日者愚宅江預光駕、久々二而得御意、畏悦難申述候、船中御詠御作等御座候哉、承度存事二候、

一内々預置候御屏風海上眺望之哥可仕、頃日取出見候處、海邊之景者すくなく候而、桜咲申たる山多く、又月も御座候、海邊者少見え申候、此方二ハ御屏風片御座候、一雙二候哉、自然梨子など二候哉と存候、乍去月候間、花月二も候哉、何とぞ其様子候者承度相待申候、一雙二候者乍無調法、一雙可仕候者、猶御作も可承候、久々預置候間、仕付可令遣存候處、右之様子故、得御意候、事々期後音之時候、恐々謹言、

（寛永四年）

七月八日

日野大納言

（花押）

鍋嶋備前守殿  
御報

### 三九、日野資茂書簡

卷3-14

追而此度者残念、紙筆二難尽候、御桌子并色紙寄合書二而、御

慰二進入候、猶重而申残候也、内呈、

薫札祝着之式存候、先此度爰元江御立寄可有之存、大悦申候処、御風氣二て直御通之由、千万残懷之至二存候、随分御保養專一二可有御座候、来春御帰国之節、かならず待入申候、扱者御国元之香爐并香壺被懸芳慮、とりく詠入候、尤可令秘藏と大慶申候、弥道中御無異御參府之御左右可承候、事々期後音不詳候、恐々謹言、

霜月二日

日中納言

（花押）

鍋嶋備前守殿  
御報

### 四〇、日野弘資書簡

卷3-15

追而屏風似合敷哥見出申候など、久々預置申候、別紙二愚哥之義者幾重にも御理申度候、

別紙之芳翰是又具令薫披候、然者去冬御札并御詠等被差越候處、於海路風波二被奪候由、舊冬者過例海上荒申候様二承候、

一去夏被掛御意候西湖十景：筆者并景名等之筆承申候、上左兵衛筆跡始而見申候而、驚愚眼候、御參勤之刻、左兵衛二被仰聞可被下候、泉州御別荘之景御屏風二而、大概令察申候、似合敷古哥見出候而と延引申候、別帋二愚詠之義、御請申かたく候、猶御上京之刻、以面可得御意候、

（日野資茂）

一山家之愚詠并中納言詠之哥、此義者何とぞ中納言相請可仕候、事々期後音申残候、恐々謹言、

（寛永七年）

二月十二日

日野大納言

（花押）

鍋嶋備前守殿  
御報

（本学名誉教授・佐賀大学地域学歴史文化研究センター特命教授）